

FLORA KANAGAWA

May. 15. 2013 No.76

神奈川県植物誌調査会ニュース第76号

〒250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



図1. タチヒメクグ (箱根町お玉ヶ池 2012年9月15日 勝山輝男撮影).



図2. タチヒメクグの小穂.

箱根お玉ヶ池のタチヒメクグ

(勝山輝男)

タチヒメクグ (別名マメクグ) *Kyllinga kamschatica* Meinsh. は減水裸地に生える1年草で根茎が発達しない。一般の図鑑にはほとんど紹介されていないが、『神奈川県植物誌 2001』(北川・堀内, 2001)で箱根お玉ヶ池で1984年に採集された標本(KPM-NA1075378)が発見され、形態や生態についても詳述された。小穂の竜骨上に小棘が生えるので、アイダクグ *Kyllinga brevifolia* Rottb. var. *brevifolia* に混同されることがある。箱根お玉ヶ池では水量の少ない年にしか発生せず、その後は観察することができなかったが、昨年(2012年)は秋に水量が減り、久

しぶりにタチヒメクグがたくさん発生し、写真撮影することができた。写真のように生えている雰囲気はヒメクグやアイダクグとだいぶ異なる。

タチヒメクグは県内では箱根お玉ヶ池のほか、2009年に相模原市緑区(津久井町)中村(KPM-NA0165142)と同区(相模湖町)沼本(KPM-NA0163610)で酒井藤夫・啓子夫妻が採集している。

また、これまでヒメクグ属をカヤツリグサ属に含める場合には学名がなかったが、*Cyperus kamschaticus* (Meinsh.) Yonek. in J. Jpn. Bot. 86: 239 (2011)の新組合せが作られた。

なお、お玉ヶ池の減水裸地にはタチヒメクグのほか、アズマツメクサ *Tillaea aquatica* L. やニッコウコ

ウガイゼキショウ *Juncus nikoensis* Satake などが生じることがあるが、アズマツメクサは2006年と2012年に発生が確認されたが、ニッコウコウガイゼキショウは1992年以来確認されていない。

昨年の勉強会より—ツメクサ属の検索— (勝山輝男)

『神奈川県植物誌2001』には、ツメクサ属はツメクサ *Sagina japonica* (Sw.) Ohwi, ハマツメクサ *Sagina maxima* A.Gray, アライトツメクサ *Sagina procumbens* L. の3種のみが掲載されている。最近、西日本を中心にイトツメクサ *Sagina apetala* Ard. やキヌイトツメクサ *Sagina decumbens* (Ell.) Torr. et A.Gray が定着して来た。しかし、キヌイトツメクサについては『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』以外には掲載されているものがなく、イトツメクサ、キヌイトツメクサ、アライトツメクサの区別点について書かれているものがない。イトツメクサは Ohwi (1942) が広島市内に帰化したものを同定し、和名を与えたものであるが、すでに東京都心の路傍間隙でも見られる(図1)。キヌイトツメクサは近畿地方でツメクサ属の未同定種としてキヌイトツメクサの和名で扱われてきた(北河内自然愛好会編, 2004ほか)もので、その後、岡山県や中京圏にも分布を広げていたが、大森(2010)が群馬県高崎市に帰化したものを同定し、日本新産帰化植物として報告した。イトツメクサとキヌイトツメクサの2種が、そろそろ神奈川県でも市街地から記録されるのではないかと思い、昨年(2012年)6月の植物誌勉強会でツメクサ属を取り上げた。

勉強会ではチシマツメクサ *Sagina saginoides* (L.) H.Karst. を含めた6種について、萼片の数、果時の萼片が直立するか開出するか、種子のサイズと表面



図2. アライトツメクサ(箱根町2010年6月28日 勝山輝男撮影) ..

の様子、小花柄上部の腺毛、葉の基部の毛、葉の質などの形質を、標本を確認しながら表にまとめた。このときの表をもとに、高山性のチシマツメクサを除いたツメクサ、ハマツメクサ、アライトツメクサ、イトツメクサ、キヌイトツメクサの5種について、神奈川県産ツメクサ属として検索表を作成し直した。

ツメクサとハマツメクサの区別は『神奈川県植物誌2001』でも正確になされているが、ハマツメクサは必ずしも海岸の植物ではなく、内陸の市街地でも路傍間隙に普通に見られる。『神奈川県植物誌2001』のハマツメクサの分布図はまだまだ不十分だと思われ、もっと内陸でも路傍間隙には多いはずである。

なお、3月末に横浜のみなとみらい地区を通りがかった際、ランドマークタワーの下の階段の間隙にキヌイトツメクサが生育しているのを見つけ、標本を作成した(KPM-NA0202811; 図3)。アライトツメクサも箱根などの涼しい地域で増加傾向にある(図2)。イトツメクサとキヌイトツメクサは越年草で、早春から初夏までが採集シーズンなので、市街地の路傍間隙に注意していただきたい。



図1. イトツメクサ(東京都江東区木場公園2010年6月13日 勝山輝男撮影) ..



図3. キヌイトツメクサ(横浜市西区みなとみらい2013年3月26日 KPM-NA0202811) ..

神奈川県産ツメクサ属の検索

- A. 花は4数性，花弁は微少またはない．果時の萼片は開平
B. 全体に無毛．花は上方の葉腋に単生.....アライツメクサ *Sagina procumbens*
B. 少なくとも上方の葉の基部には縁毛があり，花柄には腺毛がある．花序は集散状... イツメクサ *Sagina apetala*
- A. 花は5数性（ときに4数が混じる），ふつつ花弁がある．果時の萼片は直立
B. 種子は直径 0.3-0.4mm，茎や葉は繊細，ほとんど無毛で花柄に疎らに腺毛がある．種子は網目模様.....キヌイトツメクサ *Sagina decumbens*
B. 種子は直径 0.4-0.6mm，茎や葉はやや肉質，腺毛があるか無毛
C. 種子には細かい円柱状突起がある.....ツメクサ *Sagina japonica*
C. 種子はほぼ平滑.....ハマツメクサ *Sagina maxima*

標本：横浜市西区みなとみらい 勝山輝男 2013.3.26
KPM-NA0202811

引用文献

北河内自然愛好会編，2004. 北河内植物目録.
150pp. 北河内自然愛好会，大東．

大森威宏，2010. 日本新産帰化植物キヌイトツメクサ
(ナデシコ科) . 植物研究雑誌，85: 192-194.

Ohwi, J., 1942. Symborae ad Floram Asiae Orientalis
18. *Acta Phytotax. Geobot.*, 11: 249-265.

箱根駒ヶ岳のホソバナアマナが健在

(勝山輝男)

ホソバナアマナ *Lloydia triflora* (Ledeb.) Baker は『神奈川県植物誌 1988』では記録されなかったが，内田藤吉氏が箱根駒ヶ岳で撮影した写真が *Flora Kanagawa* 29 号（1990 年）の表紙を飾った。『神奈川県植物誌 2001』の調査では箱根駒ヶ岳と丹沢表尾根で採集され，下記2標本が引用されている。『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』では，県内の産地が限られることから絶滅危惧 I A と判定され，箱根駒ヶ岳のものは 1995 年頃に失われたとされた。

博物館で箱根を紹介する映像の撮影のため，昨年（2012 年）5 月に駒ヶ岳に登ったところ，以前と同じ場所にホソバナアマナが数本開花しているのを見つけた（図 1）。これまでも駒ヶ岳に登った際には，ホソバナアマナが出ていないか注意していたが，発見できないでいた。久々の再会であった。

標本：箱根駒ヶ岳 1990.5.16 内田藤吉 KPM-NA1103029（『神奈川県植物誌 2001』では 1990 年 5 月 19 日採集とされている）；秦野市丹沢表尾根 1999.5.9 梅木俊子・金井和子・山本絢子 HCM-81739.



図 1. ホソバナアマナ（箱根駒ヶ岳 2012 年 5 月 14 日 勝山輝男撮影）。

相模湖のヒメヘビイチゴ

(秋山幸也)

相模原市緑区の寸沢嵐（旧相模湖町）で，ヒメヘビイチゴ *Potentilla centigrana* Maxim. の群生を確認した。当地での分布情報はすでに宮崎・秋山（2010）

で報告されているが，本年（2012 年）も良好に生育・開花していることを確認（図 1）したこともあり，次の植物誌を意識し，改めて本誌上で報告する。

場所は石老山の麓の林道で，小さな沢を伝った水が林道脇に小さなぬかるみをつくっている。そのぬかるみを覆うように 3 × 5 m ほどの広さでそれぞれ両脇にマット上の群落が形成されている。

本種は『神奈川県植物誌 2001』によれば，箱根にいくつか古くからの分布記録があるのみで，県内の他地域での記録は無い。今回報告するのは県内



図1. ヒメヘイイチゴ (相模原市緑区寸沢嵐 2012年5月30日 秋山幸也 撮影)。

で箱根以外の唯一の分布地となるが、県外周辺地域の分布状況などから見て、これほど局地的な分布傾向の種であるとは考えにくく、他にも気付かれていない分布地の存在が推測される。

花が小さい上に、匍匐してべったりと広がる群落の勢いの割には花数も多くなく、結実した果実は赤熟せずあまり目立たない。開花期以外に見つけても、他のキジムシロ属の植物と混同しやすいものと思われる。

また、当地の個体群は『神奈川県植物誌 2001』で言及されている品種の記述に照らせば、*Tachigehime-heiichigo form. patens* Hiyama の型であった。

標本：相模原市緑区寸沢嵐 (標高約 400m) 宮崎 卓 2009.10.22 SCM41962；同地点，秋山幸也 2012.5.30 SCM46307.

引用文献

宮崎卓・秋山幸也，2010. 相模原市津久井地域の植物相 (第3報) . 相模原市立博物館研究報告 第19集 . pp.75-84. 相模原市立博物館，相模原.

青葉区で突然ミヤマキケマンの群落が出現 (中島 稔)

青葉区の寺家ふるさと村在住の友人から、「黄色い花が群生した」、「ミヤマキケマンのようだ」との連絡をもらった。「そんなはずはない」、「横浜にはミヤマキケマンは分布しないはず」、「海岸性のキケマンの見誤りでは？」(筆者の住む東京では、キケマンは井の頭線に沿って相当奥まで進出しているのを見たことがある)。

現地に確認に行ってみると間違いなくミヤマキケマン *Corydalis pallida* (Thunb.) Pers. var. *tenuis* Yatabe だった。あたり一面、数えきれないほどの個体が黄色い花を咲かせていた。3年ほど前に里山雑木林の一部で、コナラ、クヌギの成木を残して、アズマネザサや低木、

下草を伐採したそうで、それが今年になって急にミヤマキケマンの群落が出現したようだ。

『神奈川県植物誌 1988・2001』、『横浜の植物』(横浜植物会編, 2003) のケシ科担当の横浜植物会会長の高橋秀男氏も興味を持たれたので、現地を案内した。一面の群落を見て「全く説明が付かない」と言う。ミヤマキケマンは、神奈川県内では丹沢、箱根の山地、主として相模川以西に分布し、横浜市では高橋氏が、栄区の草地の斜面で1株だけ採取した記録があるだけのようなだ。もちろん青葉区に分布の記録はない。

東北地方の人の話では、山の樹林を伐採するとしばしばミヤマキケマンが出現するとのこと。しかし、周りの草木が成長し、陽当たりが悪くなると2～3年で突然姿を消してしまうという。「ミヤマキケマンは好日性のパイオニア植物の形質を持つと思う」と言っていた。

しかし、そうだとしても、分布の無かった所に伐採後3年を経て突然群落が出現する説明には不十分。東北地方と同じように2～3年で消滅してしまうのか、興味を持って観察を続けてみたい。

標本：横浜市青葉区寺家ふるさと村 中島 稔・高橋秀男 2013.4.10 KPM-NA0202835.



図1. ミヤマキケマンの群落 (横浜市青葉区寺家ふるさと村 2013年4月10日 中島 稔 撮影)。

ヒメアシボソの有柄小穂の退化 (木場英久・松谷優香)

卒業研究の観察材料として花壇でヒメアシボソ (アシボソの芒のないもの) *Microstegium vimineum* (Trin.) A. Camus form. *willdenowianum* (Nees) Osada を育てています。2012年11月13日、かなり寒く感じるようになって来たころ、それでもヒメアシボソは健気に貧相な花序を出し続けていました。この貧相な花序をよく見てみますと、有柄小穂が退化していて、柄だけになっていました。

イネ科のヒメアブラソスキ連の植物は、基本的に総

の各節に長柄小穂と短柄小穂がペアになってつきま
す。短柄小穂の柄が短くなって柄がなくなると無柄
小穂と呼ぶことになり、そうすると相方の長柄小穂の
方は有柄小穂と呼びます。それなのでヒメアシボソの
場合、小穂のペアは有柄小穂と無柄小穂と呼ばれま
す。長柄小穂は、種によってさまざまな度合いで退
化が見られます。セイバンモロコシのように雄性になっ
たり、ウシクサのように小さな穎と芒だけになったり、
コブナグサのように小穂は完全になくなり、さらに柄も
小さな刺だけになってしまうような例もあります。しか
し、ススキ、アブラススキ、アシボソなどは長柄小穂
と短柄小穂の形や大きさなどがほぼ同形のグループ
です。小穂の形が同じかどうかは、連から属への検
索にも使われる重要な特徴です。それなのに花期の
終わりとはいえ、変化してしまうというのは、かなり意
外なできごとでした。

ヒメアシボソで有柄小穂の退化が起きるのは、総の
先端付近です。総の基部寄りでは有柄小穂も正常
に育っていました。数はわずかですが、手元にある
ススキやササクサなど同形のの小穂をつける種の標本
を見てみましたが、総の先端付近で、長柄小穂が退
化するようなことは見られませんでした。逆にコブナ
グサやウシクサなど、長柄小穂の退化が見られる種
で、総の基部では退化の傾向が弱いかと思って見て



図1. ヒメアシボソの総の先。
2012.11.14 撮影。バーは
5mm。矢頭は小穂本体が退
化した小穂の柄。矢印は退
化していない有柄小穂。

みましたが、やはりそういうこともありませんでした。
まだ観察した個体数も種も少ないので、ススキをは
じめとして、ヒメアブラススキ連の仲間が穂を出すこ
ろになったら、皆さんも長(有)柄小穂が退化してい
ないかを観察してみてください。

タケ・ササ類ノート〈1〉タケ・ササ類の採 集適期到来 - タケノコの皮を忘れずに - (支倉千賀子)

マダケ属、メダケ属、ナリヒラダケ属はいずれも稈が
高く、地際から直立し上方の数節に枝を2から数本出
すタケ・ササ類です。この3属の識別では稈が伸び
きるころに稈鞘(マダケ属ではタケノコの皮)が脱落
するか、密着して着いたままか、ゆるく着いているか
ということや葉鞘上縁の肩毛の色・形状が重要な識別
点になります。また、マダケ属のモウソウチク、マダケ、
ハチクの識別では稈鞘の毛と斑の有無が識別点の一
つとなります。このため古い枝では稈鞘や状態の良い
肩毛が観察できないので標本の同定が難しくなります。

これらの3属の標本作製する場合、状態の良い稈
鞘(図1)と葉鞘上縁に肩毛の着いた枝を採集する
ことが大切です。この時、数種類が同時に生えている
こともあるので、同種の稈鞘と枝を採集しているかを確
認したり、枝付の稈と枝が付いていない部分の稈を2
節ずつ採集し、太いものでは縦に半割りにして標本に
すると、確実に同定できる標本が作製できます。

神奈川県¹の低地では4月下旬くらいからメダケ属や
ナリヒラダケ属の新しい枝が始め、識別点の一つ
である葉鞘上縁の肩毛をよい状態で観察することが
できますので、この時期からしばらくはタケ・ササ類
の標本採集適期となります。2年目の稈の稈鞘の状
態が分かる下方の2節と枝がついている上方の1節



図1. モウソウチクの稈鞘。

をそれぞれ切り出して一緒に標本とするのがよいようです。なお、標高が高いところのタケ・ササ類やマダケ、ハチクの採集適期はやや遅れます。

2013 年度総会の報告

(事務局)

2013 年 4 月 7 日 (日)、生命の星・地球博物館講義室において、2013 年度の役員会・総会が開催され、報告・議事とも、了承されました。今回の総会は、昨年度の総会で示された 2017 年度の「次の植物誌」の刊行に向けて、調査の進め方などのロードマップを示す発起総会と位置づけたもので、多くの会員の皆さんが出席されました。

● 2012 年度 事業報告

●各ブロックの活動報告

● 2013 年度 運営体制

● 2012 年度 決算報告・監査報告

● 2013 年度 事業計画

● 2013 年度 予算

● 次の植物誌について（総会時の説明を抜粋；一部、総会後の調整事項を含む）

● 会員各自が留意すべき点

目次

勝山輝男：箱根お玉ヶ池のタチヒメグ	907
勝山輝男：昨年の勉強会よりツメクサ属の検索	908
勝山輝男：箱根駒ヶ岳のホソバナアマナが健在	909
秋山幸也：相模湖のヒメヘビイチゴ	910
中島 稔：青葉区で突然ミヤマキケマンの群落が出現	910
木場英久・松谷優香：ヒメアンボソの有柄小穂の退化	911
事務局：2013年度総会の報告	912
事務局：腕章と調査証の配布について	914
事務局：メーリングリスト関連のお知らせ	914
標本同定会兼勉強会の案内	914
編集後記	914

腕章と調査証の配布について

(事務局)

調査を円滑に進めるための一助になればと、以下のものを用意しました。いずれも「名札」のようなもので、「採集許可証」ではありませんので、ご注意ください。

●腕章

植物誌調査の際に要望の高かった腕章を作成しました。調査時に代表者が着用したり、必要に応じて個人に配布したりと活用いただければと思います。基本的には、ブロックにその運用をお任せしますので、希望者はブロック事務局へご一報ください。

●調査証

今号の Flora Kanagawa には「神奈川県植物誌調査への御協力について(依頼)」を同封させていただきました。生命の星・地球博物館の館長名で、調査会の植物相調査の説明と採集へのご理解をお願いした文書です。会員以外の方へ調査内容を説明する際にご活用いただければと思います。

メーリングリスト関連のお知らせ

(事務局)

・登録のご希望は、「植物誌調査会メーリングリスト登録希望」とのタイトルをつけ、本文に「お名前」をご明記の上、kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp まで電子メールを送信してください。

・登録を希望するのに音沙汰がない、登録していたけど来なくなった、という場合には事務局までお問い合わせください(電子メールまたは電話)。

標本同定会兼勉強会の案内

標本の同定会を兼ねて、植物の勉強会を開いています。2013年6月以降の予定は以下のとおりです(内容は変更の可能性があります)。

6月1日(土) イネ科2

7月13日(土) セリ科

8月24日(土) 路傍雑草

9月16日(月・祝) 水田雑草

10月14日(月・祝) イグサ科

会場や資料の都合で参加人数を把握したいので、参加される方は前日までに電子メールか電話で事務局(本ページ左下参照)へ連絡を入れてください。

なお、5月3日(金)には「イネ科1」が行われました。

編集後記

いよいよ本格的に次の植物誌への調査が始まりました。事務局の力不足もあり、数年前からこのような体制に移行できれば…との反省もありますが、まずは、スタート地点です。不甲斐ない事務局ではありますが、会員の皆さん、ブロック事務局の皆さん、運営委員の皆さんのお力添えで、『神奈川県植物誌2017』(仮称)の刊行を目指し、頑張っていきたいと思っています。

(田中徳久)

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000円